

Slope(東工大 OLT-OB/OG 会会報) #12

発行者:つばめ会広報部 発行年月日:2002年4月10日 第2巻第1号(通巻第12号)

会長の挨拶

つばめ会会長 高橋秀行(2期)

渡戸氏とともに東工大でオリエンテーリング部を創設して以来、すでに丸22年もの歳月がたちました。創設時には、それこそまだこの世に生まれ出ていない人たちが、今の東工大 OLT メンバーを構成していると思うと、時の流れを感じせざるを得ません。卒論・修論でお世話になった教授は、2年前に退官。その退官パーティ出席の際、10年ぶりに訪れた大岡山は、駅前の様子がすっかり変わり、完全に浦島太郎状態でした。その割に研究室はそのまんまでしたが…。東工大との関係がだんだん薄れていく中、つばめ会とは、唯一電子と紙の上でのつながりをさせてもらっています。つばめ会・東工大 OLT が、これからもますます発展していくことを期待しています。

幹事長の言葉

つばめ会幹事長 奥田健史(16期)

つばめ会幹事長の奥田です。みなさん、いかがお過ごしでしょうか？

21期のみなさん、つばめ会へのご入会おめでとうございます。みなさんはOLTを卒業しましたが、これからも仲間との付き合いや後輩への応援は続けていきたい、と思っている方が多いのではないのでしょうか。

これらについて、個人でもある程度のことはできると思います。でも、集団ならもっといろんなことが具体的に実現できるに違いありません。そのために存在するのがつばめ会です。つばめ会の活動として、つばめ会合宿やインカレ広告などが挙げられます。これらを個人で行うことは難しいような気がします。つばめ会だからできることなのでしょう。

このような「OB・OG 相互の親睦」と「現役部員の活動への支援」を実現するための「きっかけづくり」が幹事長の役割だと考えています。どちらも必要不可欠なことなので、両方とも重視するつもりです。みなさんのアイデアはできるだけ実現していきたいと思いますので、ご意見をよろしくお願いします。

最後に、つばめ会合宿でみなさんとお会いできるのを楽しみにしています。今年はいつものメンバーはもちろん、若い方々も来てほしいですね。

Slope#12 Contents

1	会長 幹事長の挨拶
2	矢板インカレ特集 ~ リレーME 七位に終わる~
6	つばめ会総会報告 ~ 奥田幹事長を選出~
7	新部長の挨拶 ~ 新部長は田中淳一君~
8	全日本大会特集 ~ 円井選手の記録~
14	つばめ会合宿の案内
14	各役員からの連絡、編集後記

矢板インカレ速報

リレーME、7位に終わる

クラシック ME で蔵田が 8 位、WE で松澤が 18 位と健闘

3 月 8~10 に栃木県矢板市で第 24 回日本学生オリエンテーリング選手権大会(以下、矢板インカレ)が行われました。

9 日に行われたクラシックは ME に山根(4)、蔵田(3)、菊沢(3)、藤野(3)、氏原(3)、斉藤(2)の各選手、WE に松澤(4)が挑み、ME では蔵田が 8 位、WE でも松澤が 20 位以内に入るなど健闘しました。蔵田は、今年は惜しくもシード漏れをしてしまったものの、シード選手がゴールするまで速報ボードで一位をキープ、会場を沸かせました。ちなみに、優勝したのは ME が小泉成行選手(筑波大 4 年)、WE は番場洋子選手(京大 4 年)です。なお、蔵田の今回のクラシックでの 8 位という順位は、東工大では世古口裕史氏(16 期)の 6 位に次ぐ順位です。

10 日に行われたリレーでは、ME では東工大は斉藤(2)-山根(4)-蔵田(3)-菊沢(3)という走順で臨みました。終盤まで激しく入賞争いを演じたものの、最終的には新潟大学の後塵を拝し、7 位という結果に終わってしまいました。東工大がリレーME で 7 位になるのは 97 年奈良インカレ、00 年日光インカレに続き三度目です。なお、XU で井ノ川(3)-松澤(4)-岡部(4)のチームが 2 位に入りました。今回のインカレでの東工大のメダルはクラシック、リレーのそれぞれ選手権、学生一般通じてこれ一つという寂しい結果になってしまいました。ME 優勝は京都大学、WE 優勝は東京女子大学です。

矢板インカレ結果

クラシック(個人戦)

ME

- 1 171 小泉 成行 筑波 4 1:11:34
- 2 179 許田 重治 京都 4 1:14:06
- 3 167 金澤 拓哉 東北 4 1:14:16
- 4 175 大嶋 真謙 北海道 4 1:14:35
- 5 184 青木 博人 東京 2 1:16:30
- 6 155 佐々木良宜 筑波 3 1:18:16
- 8 119 蔵田 真彦 東工 3 1:19:53
- 40 122 山根 洋之 東工 4 1:33:27
- 42 108 菊沢 恵三 東工 3 1:33:36
- 56 145 藤野 友祐 東工 3 1:39:23
- 60 136 斎藤 孝男 東工 2 1:41:12
- 67 144 氏原 直人 東工 3 1:44:01

WE

- 1 256 番場 洋子 京都 4 1:05:24
- 2 240 宮内佐季子 京都 1 1:05:37
- 3 244 石川 裕理 京都 3 1:13:16

- 4 242 大塚 泰恵 金沢 2 1:17:42
- 5 236 山本真美 東女 4 1:23:20
- 6 232 高橋ひろみ 慶應 4 1:24:10
- 18 259 松澤理子 東工 4 1:38:17

リレー(団体戦)

ME

- 1 京都大学 3:59:53
(岡野、西尾、新宅、許田)
- 2 東京大学 4:00:17
(青木、加藤、久野、降旗)
- 3 早稲田大学 4:10:21
(知念、櫻坂、寺垣内、榎本)
- 4 東北大学 4:14:28
(堀江、禅洲、菅原、金澤)
- 5 筑波大学 4:20:46
(武政、佐々木、増田、小泉)
- 6 新潟大学 4:29:46
(中野、樺沢、大竹、今福)
- 7 東京工業大学 4:32:12
(斎藤、山根、蔵田、菊沢)

アンカーとしてリレーMEに臨んだ菊沢恵三君に原稿を書いていただきました。ここに掲載したいと思います。

矢板インカレ

22期 菊沢恵三

こんにちは、厚かましくもつばめ会報の原稿を書かせて頂きました22期の菊沢です。これを書いているのは矢板インカレから二十日経っているためだいぶ気持ちも落ち着いています。自分にとっての矢板インカレの中で何についてこの場で書くか考えましたが結局リレーについて書くことにしました。

～インカレリレーまで～

この一年は常にリレーメンバーを意識した年でした。リレーメンバーになる自信は当初からあり一年を通じて揺らくことはありませんでした。ただ、入賞という目標を達成するために自分に課したレベルには最後まで到達できませんでした。それはそれとして走るとすれば初めてとなる選手権リレーで実力を発揮するためにはどうすればよいかを年明けぐらいから考えていました。具体的には走順と状況を設定して実際にレース中に何をするか等を考えてました。最初自分は一走になる可能性が濃厚であったため、一走というやや特殊な条件の中で期待されるタイムを出すための戦略を練っていました。しかし直前合宿で決定した走順はアンカーでした。一走以上に起こりうる状況は多く対策に苦慮しました。直前合宿からインカレ本番まではそのようなイメージトレーニングを主にしていました。

～インカレリレー当日～

リレー本番当日は序盤から番狂わせた展開となり波乱を予感させました。優勝に一番近かった筑波・東北のまさかの出遅れ等。その後の戦況はほぼ予想通りに動き、自分がスタートする時には新潟大を追い北海道大から逃げる展開になりました。新潟大からやや遅れていたものの勝てる自信はあり事前のイメージトレーニングのおかげで緊張もありませんでした。結果はあの通りでした。タイム的には自分の実力が出し切れていたかもしれませんが、しかしアンカーとしての役割は果たせませんでした。そんなわけでレース直後は悔しいといったものより何か複雑な心境でした。

～インカレリレーを終えて～

インカレが終わって数日経ってから今に至るまで、「なぜ自分で決められなかったのか」、戦略を間違えていたのではないかと考えた思考が毎日のように浮かぶようになりました。それに対する答えは未だ出ていません。また、そういった自分の評価と同時に、去年度全般の部全体の状況への自分なりの評価も行うようになりました。後者についてはある程度答えが出ていてそれに基づいて自分も新年度へ向け動き始めました。

～最後に～

一年間忙しい合間を縫って部に協力して下さったコーチ・オフィシャルの方々には感謝しきりです。またインカレ当日最後まで声援を下さったOBの方々にもこの場で感謝したいと思います。来年以降も是非インカレを見に来て下さい。

なお、オフィシャルとしてインカレに臨んだ円井基史氏(19期)、仁多見剛氏(20期)にも感想を書いていただきましたので、同じくオフィシャルを務めた私の感想とともに掲載いたします。

昨年度ヘッドコーチとして

円井基史(19期)

2000年度、2001年度と2年連続でOLTのコーチをさせていただきました。昨年度は、M1の川俣智氏、仁多見剛氏とともにコーチ業を行ってきました。僕自身M2ということもあり修士論文など時間的制約により十分な働きができず、コーチの二人や学生諸君に迷惑をかけた思います。

簡単ではありますが、ここで少し感想を述べさせてもらおうと思います。

・入賞ならず

2 年間という期間、コーチを引き受け、入賞という目標を達成することを第一として行動してきましたが、結局結果を残すことはできませんでした。ヘッドコーチ更迭という形が妥当ではないかと感じています。ただ、2 年間の経験で培ったものは大きく、それらは今後生かされるべきであり、ゆくゆく提言や指導という形で還元していきたいと考えています。

・コーチ間での議論

昨年度はコーチ間で意見の相違が大きく生じ、莫大な量のメールのやりとりを行いました。精神的に大きな痛手を負ったこともありました。時間的損失もありました。ただ残念なのが、これらのやりとりのほとんどがコーチ間のみで終結しており、選手側への反映がなされることが少なかったという点です。むしろ意見のやりとりは選手対コーチという形が望ましいのです。

・価値観

ヘッドコーチとして指針などを決定していく際、頼るのはそれまでの個人的経験や先輩方の意見などではありますが、それらを含めた自分自身の価値観というものを深く考えさせられました。それは自分自身の存在自体を揺るがせかねない問題でした。筑波のコーチが絶対的権限を持つ「監督制」を取っていると聞いたことがあります。コーチとはどういう立場なのか、それをはっきりさせた方がいいかもしれません。いくつかの場面でアドバイスを頂いた太田宏樹氏にはこの場を借りてお礼申し上げます。

・ヘッドコーチ、M1 コーチについて

ヘッドコーチの存在は必要だと考えます。経験のあるコーチによるヘッドコーチという存在があったほうがものごとはスムーズに進むでしょう。M1 コーチはそのコーチ経験の絶対的不足から、本来のコーチ業をうまくこなすことは難しいと考えます。M1 コーチの望まれる役割は学生との連携役またはオフィシャルとして捉えるべきでしょう。優れたコーチとは、必ずしも速い選手である必要もなく、やはりそれなりのコーチの経験と造詣の深い人をお願いするのが良いでしょう。ナショナルチームのコーチをはじめ、世の中には優秀なコーチが数多くいるものです。コーチとしての姿は、オリエンテーリング以外の分野においても習うべき人が多いはずで

・強い OLT を作るためには

どこかで聞いたことがある題目ですね。これは難題です。何しろ僕が 2 年間あるいはもっと長い時間かけて取り組んだ問題で、それは今でも実現したとは言えない代物だからです。「意識改革」、言葉では簡単に言っても、実現象は伴わないものです。しかしそれでも僕は、何らかの形でこれからもそのお手伝いをさせていただこうと思っています。

競技者としての評価は、大会の成績などで計ることができますが、コーチとしての評価は難しいものがあると思います。誰がどのような基準で計れるものなのか。果たして、ヘッドコーチとしての自分は、どのような評価をもらえるのか、気になるところでもあります。

コーチ業を振り返って、色々大変なことも多かったと思います。地図と向き合ってコースを組んだり、合宿で設置・試走・撤収と誰より多く走ったり、セレクション方法を話し合ったり、代表メンバーと面接したりなどなど。ですが、その分、オリエンテーリングと触れる機会が増えて、競技者として充実できたという面もあるでしょう。コーチとして成長できた部分もあると思います。あらゆる経験において無駄な経験はないと改めて思います。

徒然と書いてしまい、まとまりのない文章になってしまいましたが、今後の OLT の活躍を応援する気持ちは変わりません。現役の諸君、これからもがんばってください。

昨年度コーチとして

仁多見剛(20期)

インカレは残念な結果となりました。今年も6位入賞を狙ってコーチとして働いてきたわけですが、力不足は否めなかったというのが正直な感想です。しかし、毎年一步一步入賞に近づいているという感じがあり、今度こそ、と言っ感触を得ています。是非とも、来年こそは。そして、OBの皆様もよろしければその場に立ち合わせていただければ、と思います。一年間、現役のみなどとやってきて楽しかったです。今後も機会があればお相手をしたいと考えております。今後もあちこちの大会に顔を出すつもりです。よろしくお祈りします。

昨年度コーチとして

川俣智(20期)

今年度もインカレは残念な結果に終わりました。今年もインカレの入賞というものを目標にして活動してきたわけですが、達成することができず、力不足を感じています。

今年度、コーチとして選手に意識させたことは「インカレを早くから意識させる」ことでした。OLTランキングをセレクションに適用したり11月には学生(予備セレ通過者に限らない)との面談、セレクションの方向性が見えてきた1月には部内セレ通過の可能性のある選手と、走順まで踏み込んだ議論などをしました。結果的にはコーチの意図した走順ではなく、学生にある意味走順を決めさせるようなかたちになりましたが、それは我々の「早くから意識させる」という哲学がその過程に組み込まれているわけで、それはそれでよかったのではないかな、と考えています。

それで、例年はどうなのか私はわかりませんが、今年はコーチ間で議論が紛糾することがしばしばありました。根本的な部分での価値観、コーチ観の相違という部分が大きく、議論がかみ合わなかった気がします。これはどちらの価値観が正しいとか間違っているというような問題ではなく、学生がどう考えてるのか、という部分が重要なのですが、コーチ三人ですら異なる価値観(しかもどちらかといえば全員競技派)が、学生三十人で価値観が同じであるわけもなく、部が走り出してからはなかなか議論することが難しいのかな、と考えています。と言うよりも学生間で議論をするという土壌ができていないんですね。なんとかしたいとは思ったんですけど、できませんでした。一番、力不足を感じたのはこのあたりですね。

それで、個人的な意見を言うならばヘッドコーチというものは必要ないと考えています。必要がないという点、少し語弊があるのですが、コーチが積極的に部に対してイニシアチブをとらないでも済むような強固な運営体制を現役がとれば、それは幸せなことだと思います。どうしてもコーチに依存すると、そしてコーチが頑張れば頑張ろうとするほど、現役との(敢えて言えば)乖離が生じやすくなるのではないかと考えます。ただ、学生が思考停止に陥っているようなときに考えるきっかけを与えるような立場のものは必要かもしれません。それを「ヘッド」と呼ぶのなら、必要なんでしょう。ヘッドコーチという名前だけど、微妙に何もやっていないように見えて、重要なところで指針を示すような99年度の太田さんのようなやり方がいいのかもしれません。

まあ、コーチ間で衝突したりしてキズつき、キズつけたりしたり、合宿に向けて無い頭絞って、分刻みのスケジュール立てたり、合宿の運営を適当にやって失敗して夜の飲み会でボロクソに言われたり、そういうこと一つが終わってみれば、いい思い出です。こうい経験ひとつひとつが、自分を大きくしてくれると、信じてつ。

最後になりましたが、一年間 OLT をご支援くださった皆様、ありがとうございました。もう新しい年度が動き出しています。今後とも OLT に暖かいご支援をよろしくお祈りいたします。私もできる限りのお手伝いはしたいと思っています。

新幹事長に奥田健史氏(16期)を選出 ~ つばめ会総会

昨年 10 月 20 日に東工大岡山キャンパスで第五回つばめ会総会を行い、浅野昭氏(12 期)に代わる、新幹事長に奥田健史氏(16 期)を選出しました。これは二年間の期間満了に伴うものです。また、各役員も新たに選出されました。新役員の内任は来年 10 月までとなります。

役員の方に、自己紹介文を書いていただきましたので、掲載します。なお、議事録は、会報巻末の各係りからの連絡の項をご覧ください。

なお、1.役職、2.名前、3.期、4.学科、専攻、5.自己紹介、抱負です。

- 1.会長
- 2.高橋 秀行
- 3.2期
- 4.機械工学専攻
- 5.自己紹介、抱負

大学卒業後、16 年目にして転職を決意。東京に戻るつもりだったがなぜか京都で途中下車。10 年以上関西にいるのに、いまだに関西弁がうまく話せない。

- 1.幹事長
- 2.奥田 健史
- 3.16期
- 4.社会理工学研究科 経営工学専攻
- 5.「OB・OG 相互の親睦」と現役部員の活動への支援」を実現するための「きっかけづくり」をしていきたいと思ひます。

まずは、つばめ会合宿でお会いしましょう

- 1.総務部長
- 2.和田 雄一郎
- 3.16期
- 4.物理学科
- 5.1、2 回 / 年 位のペースで大会に参加しています。一応まだ現役のつもりです。誰か一緒に参加しない?

- 1.会計局長
- 2.円井基史
- 3.19 期
- 4.東京工業大学大学院 総合理工学研究科 環境理工

学創造専攻 梅干野研究室

5.会計という仕事は初めてなので幾分緊張と不安を抱えております。なにぶん、お金がそんなに好きじゃないもので。

- 1.名簿局長
- 2.當銘 直告
- 3.18期

4.情報工学科、計算工学専攻

5.大学の専攻も今の仕事もいわゆるIT系なので、その辺のスキルを生かしつつ名簿局長の仕事ができれば、と思ひます。

また幹事の一人として、幹事長の奥田氏を支えていきたいです。

1. 広報部長
2. 川俣 智
3. 20期

4. 応用物理学科卒、創造エネルギー専攻在学中

5.新たに広報部長に就任した川俣です。きちんと会報が発行できるように頑張りたいと思ひます。それと 原稿を依頼されたらできるだけ快く書いてくださいますようお願いいたします。

- 1.昨年度事務局長
- 2.仁多見 剛
- 3.20期

4.理学部化学科卒、大学院理工学研究科物質科学専攻 在籍中

5.昨年度コーチ(ヒラ)の仁多見です。今年も大会に出るつもりです。大会会場などでお会いすることになるかと思ひます。何卒よろしくお願ひいたします。

OLT,第 23 代部長に田中淳一氏(23 期)就任

新年度を迎えるにあたって、矢板インカレ終了とともに、部長が 22 期の小川千隼君から 23 期の田中淳一君へとバトンタッチされました。田中君は、埼玉県立熊谷高校出身、現在情報工学科の 3 年です。田中君に、原稿を書いていただいたので掲載します。

ごあいさつ

つばめ会の皆様、こんにちは。この度、東工大オリエンテリング部部長となりました田中淳一と申します。部長ということでつばめ会のほうに初投稿させていただくことになりました。

さて、今年も例年通り 3月にインカレが行われました。ご存じの方も多いと思いますが、我が OLT は団体戦で 7位でした。自分はリレーメンバーではありませんでしたが、悔しい思いを味わいました。しかし、一方でこの結果もアリなのかなと思いました。この悔しさをバネにすれば部全体がまとまって、今度のインカレに向けて進んでいけるのではないかと。明らかに不謹慎な考えではありますが、結果が入賞できなかったという以上は、逆にこの結果を利用して来年以降に繋げていくほかないと僕は思うのです。そして、部員にもこの悔しさをバネに頑張ってもらいたいと思います。

また、頑張るだけではなく、オリエンテリングやオリエンテリング部の楽しさを常に部員に味わってもらいたいという願いもあります。部というのは大学で参加が義務づけられているものではありません。みんなが、楽しい、やってみたいと思っているから、部に所属しているのだと思います。そして、その楽しみ方というのは人によって異なります。オリエンテリングの技術向上を楽しむ人、自然の中を走るのを楽しむ人、人とのコミュニケーションを楽しむ人、いろんなスタンスでそれぞれ部員達は楽しんでいると思います。部といふ団体で行動する以上は、多少、部員には個を犠牲にしてもらふ部分もあるかもしれません。しかし、極力、それが起こらないように考えていきたいです。けれども、これはとても難しいことです。自分でも分かっています。なので、先輩諸氏の経験談やアドバイス等をいただけたら僕もとても助かります。また、技術合宿や練習会などにご参加、ご協力いただけると幸いです。そして、技術的な指導や自分が現役のころの話などを現役部員達にいただけると嬉しいです。

現在、今年や来年以降の原動力となってくる新 1年生獲得に向けて部員一同頑張っております。自分も手探りながらも新歓に向けて頑張っています。まだまだ不慣れで頼りない部分があると思いますが、部長としてなんとか頑張っていきたいと思うのでよろしくお 願い致します。

平成 14 年 4 月

田中淳一

付表：ここ五年間の部長

年度	部長	学科
98	山田 俊介	知能
99	長藤 浩平	無機
00	浅野 剛司	無機
01	小川 千隼	情報工
02	田中 淳一	情報工

全日本大会 M21E に松澤俊行・円井基史、両選手が出場

3月24日に京都府で全日本オリエンテーリング選手権大会(以下、全日本大会)が行われました。つばめ会関係者では M21E には松澤俊行氏(2000 年度コーチ:14 期)と円井基史氏(19 期)が出場しました。連覇を期待された松澤氏は 28 位、初挑戦の円井氏は 31 位でした。また、全日本大会にはつばめ会の関係者や現役の部員の方が多数参加されたようです。

円井氏から全日本挑戦の長文の熱のこもった原稿をいただきましたので掲載いたします。

全日本大会 (2002 年 3 月 24 日)までの長い道のり - いくつかの決断と挑戦の記録 -

円井基史

はじめに

本当は、全日本で良い結果を引っさげてこの手記を披露するつもりでしたが、それはかないませんでした。ですが、全日本は僕にとって特別な思い出があった大会だったので、そこに至るまでのいくつかの決断と挑戦の記録をここに残したいと思います。

～ ノンエリートの日々 - エリートへの願望 - ～

全日本 M21E 権はおろか、普通の公認大会の M21E 権すら持っていない時代が長く続きました。公認大会の M21A クラスで 5 位以内というのが公認 E 権の獲得条件なのですが、その壁がなかなか破れなかったのです。理由の一つは、公認大会の M21A クラスは参加者が多く、しかも若名を馳せた強豪選手も少なからず見受けられたことでした。もう一つの理由は、僕が目標としライバル視しているエリート選手が全て M21E クラスに出場してしまうため、うまくモチベーションを高められずにいたことです。そもそも公認大会の数が少ない上に、僕自身が勝負弱かったとうのもあったと思います。

それでも、東大大会 ME11 位であったり、全日本リレー神奈川県代表という風に、全日本エリートと対等に戦えるようになった最近、やはり全日本選手権大会で彼らと対等な条件で勝負をしてみたいという強い欲求が芽生えるようになりました。

～ 公認埼玉 秩父大会 - 屈辱的敗北 - ～

昨年の秋以降、日に日に地獄のスケジュールが組み込まれていきました。研究生生活と競技生活との両立です。加えて学生のコーチ業もありました。犠牲となったのは睡眠時間でした。例えば、公認埼玉の前日のショート大会などは、午前 3 時に研究室から帰宅し、午前 6 時に起床して、その後、雨の中 2 レースをこなしています。この日は数々の全日本エリート(の面子の中で、高橋、松澤、藤城、安井といったナショナルチーム群に次いで 5 位だったことを覚えています。

翌日の公認埼玉、この日は何が何でも公認 E 権を獲得することが目標でした。当時僕は自分の巡航スピードには絶対の自信を持っていたので、ミスさえしなければ余裕で 5 位以内に入れると思っていました。1 番ポストを取った時点で E 権を確信、終盤には優勝をも意識、最後に 3 分ほどの凡ミス。けど E 権は余裕だと感じました。結果は 9 位、E 権獲得ならず。5 位まで 5 分、トップまで 10 分。僕はここで愕然としました。E 権を逃したことにではありません。今日のレース、どんなにミスをなくしてもトップタイムに追いつけないという事実です。「まさか、巡航で負けた？」僕はこの屈辱的な敗北を受け入れるしかありませんでした。自分の最も自信のあるところでそれを全てひっくり返されたのです。

～ 東日本大会 - 本気の勝負 - ～

僕は公認埼玉で受けた屈辱から、東日本での目標を「公認 E 権獲得 (つまり5 位以内)」ではなく「優勝」に切り替えました。もちろんこれは、東日本 M21A で優勝すればその年の全日本 E 権をも同時に獲得できるからという理由も大きかったのですが、とにかく僕は傷ついたプライドの威信を回復させるためにも、今回は賭

けに出ることを決意しました。「優勝を逃したら 20 位だっていい」つまり「優勝 or Not」という走りをするということです。「優勝っていうのは結構難しいよ。ミスしないうってことだけじゃなくて、スピードも要求される」と稲津さんがアドバイスしてくれたことがありました。挑戦するだけの価値のあるものでした。

スタート前に念じたのは「1 番、2 番ポストだけは慎重に、確実に取る」。これは TAKU さんのスタイルに習うところですが、2 番を終えたところで運良く前方に村越さんを発見。ここで村越さんに追いつき E クラスと共通のポストを高速バック。その後も集中力とスピードの維持を心掛け、ゴールへ。本気の勝負に出て、念願の E 権、しかもその年の全日本 E 権までをも獲得した瞬間でした。

～ 目標設定 - 大いなる意気込み - ～

実は僕は今まで全日本大会そのものに参加したことがなく、今回初めての参加が選手権クラスということで大いに興奮ぎみでした。「全日本チャンプに近づく」という自分の中での目標に挑戦できる舞台を自分の手で獲得したのです。全日本チャンプ、それは前年度共に東工大のコーチをした松澤俊行さんからの影響が大きいものでした。まだ見ぬ全日本の舞台。そこで走る松澤さんや村越さんはどんな表情で何を考えて走っているのだろうか。

走ることには目標を設定したいものです。もちろんチャレンジャーです。優勝と言いたいところですが、何がどうひっくり返っても手が届きそうにありません。東大 ME11 位、埼玉ショート5 位など、当たれば当たる自信はありました。分かりやすく10 位。僕は全日本 10 位を以下の目標に設定しました。これがこれから大きくそびえ立つ修士論文という大きな障害に負けずトレーニングを続けるモチベーションの維持に大きく貢献してくれることを期待しました。全日本で 10 位、これはすなわち日本で 10 番目に速い選手ということです。僕は大いなる意気込みを手に入れました。

～ キックオフ合宿 - 故障 - ～

年末、スコート主催のキックオフ合宿に参加しました。多くのナショナルチームレベルの人々の走りを体感したいと考えてのことです。日本トップ陣と自分との差は何か。それを確認すれば、その差を縮められると考えました。初日、メニューを終えた僕は、右膝に原因不明の痛みを抱えていました。階段の上り下りすら苦痛で顔が歪みました。キシキシと嫌な痛みが右膝外側に走りました。僕はこの初めて感じる種類の痛みで冷や汗が出ました。コ・レ・ハ・コ・シ・ヨウ・ナ・ノ・カ・?

同じ合宿に参加されていた太田 Z さんに相談しました。「おそらく腸脛靭帯炎だね」この不可解な症状に診断が下され、僕は精神的に幾分落ち着きました。同じ合宿に参加されていた羽柴さんも「今年は腸脛靭帯炎で 9 ヶ月走れなかった」、太田 Z さんも僕は過去 3 回やった」と言われており、安心すると同時に油断しないと気を引き締めました。

翌日、メニューには参加せず、トレインを歩くことにしました。しかしトレインの不整地を登るだけで足に激痛が走りました。いつもなら爽快に走り抜けているところをです。本当に嫌な痛みが僕を苦しめました。一つのサーキットすら回ることすらできませんでした。果たして僕には再びこういった不整地を全力で走ることができる日がやってくるのだろうか、そういった不安が生じるほど当時の僕にその故障は共存できないものでした。

最終日の朝、僕が故障した同じ日に太ももに倒木を突き刺すという大けがをした村越さんが市内の病院に行くというので、同乗させても

らって朝一で帰路につきました。まさかこんな大けがをした人が 3 ヶ月後覇者になるとは、このときは想像できませんでした。

～ 故障の日々1 - リハビリ - ～

初めての故障でしたが、別に落ち込むことなく日々を過ごしました。それまでがトレーニング過多な部分もあり、トレーニングをしなくていい理由があることはある意味うれしくもありました。それに「故障を克服して全日本で鮮烈にデビューする」というビジョンを鮮やかに持つことができていました。それはやりがいのあるチャレンジに思えました。

合宿明けから1週間は完全休養でトレーニングを中断させました。インターネットを使い腸脛靭帯炎に関する様々な情報を漁り、横浜のスポーツ医科学センターを尋ね、リハビリメニューに取り組みました。主にストレッチ、筋トレ、エアロバイク、ジョグ、アイシングです。2週間ぶりにおそろおそろ走ったときは少し感動ものでした。回復は順調でした。心拍計も導入しました。修論で本当にぼろ雑巾みたいな生活を送りながらも、最低限のトレーニングだけは続けました。体力の低下もそれほどないと自覚しました。故障して 2 ヶ月後、学生の合宿に参加し、全力で走れることを確認しました。さすがに故障前の無尽蔵な体力はないものの、最低限の体力は維持できているようでした。この時点で遠くでかすんで見えなくなりつつあった全日本 10 位という目標も再び実現可能のものとなりつつありました。修論も終わり自由の身となった今、残り1ヶ月で体力とスピードを復調させれば、故障前のレベルには戻せると感じました。

～ 故障の日々2 - 焦りと旅立ち - ～

学生の合宿の1週間後、ユニバーセレの行われる勢子辻に入りたく思い、サンスーシの AMEX 合宿に参加させてもらいました。しかしここで忘れていたあの痛みが再開。そう、あの憂鬱な痛みがまたしても右膝に顔をのぞかせたのです。メニュー後アイシングで何とか日常生活に支障は持ち込ませませんでした。しかしその2日後、学生の練習会にランナーとして参加し、完全にアウトの状態に陥りました。強烈な痛みがまた僕を襲いました。平地ですら歩くと痛みが走りました。氷で丸 2 日間、患部を冷やし続けました。何とか痛みは治まりました。この時点で全日本まで2週間強。そう2週間。ありえない気がしました。

そのすぐ後に学生のインカレを迎えました。学生達は、かつて僕が情熱を燃やしたその大きな大きな舞台上素晴らしいパフォーマンスを見せていました。しかし、故障直下の僕には、その雰囲気に入るのはいさむろ苦しいものでした。学生達は、それまで準備してきたものをこの舞台上で遺憾なく発揮しようとしている。みんな輝いていました。その一方、僕は走ることが、走ることによって生じる痛みが恐怖であり、歩くことで精一杯という有様。選手達がうらやましいという思いと、置いてけぼりをくらった寂しさと、走れない歯がゆさ、全日本に間に合わないのではという苛立ちがありました。コーチをしてきた後輩達とともにアップやダウンと一緒に走ることもかかないませんでした。インカレ後、僕は九州へ、屋久島へ旅立つことに決めていました。しかし、思いもよらぬ腸脛靭帯炎の再発により、全日本のために東京に残ってリハビリに専念した方が良いのでは、トレセンに通ってバイクを漕いだ方が良いのでは、山だって登れないかも知れない、そういう迷いもありました。しかし、今からあのリハビリをしたところで、1月2月の間に落ちた体力が戻るとは思えませんでした。一か八か、僕はリハビリを捨て、通常のトレーニング復帰への道を選びました。全日本後に走れなくなったっていい、とにかく全日本までには少しでも前へ進みたい、そういう思いでした。

少し回想。もし僕が客観的な立場で、例えば僕が自分自身の個人コーチでもしている立場だったら、お前には未来がある。来年だって、その次だってある。今無理して長い競技人生を棒に振るつもりなのか。今は我慢だ、こう言うでしょう。もちろん僕もそう考えることはできました。だが、頭で分かってもやはりそれには従えませんでした。自分のことは自分がよく分かる。「行ける」、そう本能が言っていたのです。

～ 山への挑戦 - 決断と挑戦に勝つということ - ～

耳をすませて体が発する声を感じる」違和感があつたらすぐにトレーニングを中断しろ。僕は故障の多い学生たちにそう言ってきました

たし、自分自身にもそう言い聞かせてきました。しかし、今回の場合、違和感はすぐそこに存在するのです。それは明らかに自己主張しています。だが僕は敢えてその悲鳴の中、走ることを続けました。上坂さんが「もうどうにもよくならん状態だったので、トレーニングを続けた」とおっしゃっていました。その時はどういう意味がよく分かりませんでした。しかし、今となっては切実に分かります。もう治るのを待つ時間はないのです。保存的療法、今回のやり方をそう呼んでいいのかが分かりませんが、とにかく走りながら治していく方法を僕は選びました。

鳥取で地元の山を登りました。違和感はやはりありました。翌日、山口の長門峡を走りました。ゆっくり走ったにも関わらず、違和感は微妙な痛みへ変化しているようでした。2日後、霧島山と開聞岳に登りました。開聞岳の下りではついに足が爆発し、歩くことでさえ痛みが生まれました。大好きな登山が初めて嫌なものに思えたときでした。何なんだ、この苦しい旅は？オレはこんな苦しい旅をまだ続けるのか？このまま泣き寝入りした方がいいんじゃないのか？僕は自問自答しました。

屋久島へ渡りました。ヤクスギランドを歩きました。痛みが出ないかどうか気が気でありませんでした。翌日には、水平距離 30km、標高差 1300m、コースタイム 16 時間の登山が待ちかまえていました。九州最高峰、宮之浦岳です。フェリー乗り場の観光案内所に登山届けを出しました。「えー！、日帰り？縄文杉で引き返

すんじゃないの？じゃあ、淀川から上ればいいわよ。え？じゃあ今から登って小屋に泊まりなさい。そうすればゆっくりできるわよ。とにかくこんな無理な計画書は受け取れないわ」係りのおばさんは、僕の行程を認めようとはしませんでした。「ふんっ、そりゃ無理だ。登ってきたら焼酎飲ませてやるよ」海中温泉で話した地元のおじさんには鼻で笑われました。「名前は何て言うんだ？帰ってこなかったら捜索隊に連絡するよ」その潮にのまれる珍しい温泉で僕はちょっとした話題になりました。

正直ぎりぎりまで迷ったことも事実です。コースタイム 16 時間、普通なら 8 時間、好調なら 6 時間程度で行けるところです。ちなみに山岳耐久では 24 時間のコースを 10 時間です。今回ゆっくり行ったとしても 10 時間程度なら行けるはず。しかし途中でこの足が壊れたら、例えば開聞岳の状態になったら、とてもじゃないけど山頂は無理かもしれない。もしくは帰還が夜になるかもしれない。ここは諦めて淀川から登ろうか、それなら余裕で山頂に行けるし、足への負担も少ない。縄文杉で引き返すのもいい、山頂はまた別の機会でもいいじゃないか。全日本を控えた今、ここで足を壊していいのか？「いいんだ」僕は思いました。後悔する。そう思ったのです。変に頑固だと思われても仕方ないでしょう。一度決めたことはどんな形であれやり通す。それがいつしか僕の信念になっていたのです。朝 4 時半、僕は目覚めました。あたりは真っ暗です。寒い。朝食を食べ、キネシオテープを 2 重にはり、捻挫予防テーピングを巻き、タイツ、シャツ、ゴアテックスの雨具を着込み、水と食料が入ったリュックを背負いました。そして今回は念のため小さな懐中電灯を用意しました。今日は今までの人生の中で最もタフな行程となるかもしれない」そう思いました。朝 6 時前、駐車場には続々と登山者の車がやってきました。夜明けです。朝 6 時、みんなが支度している中、一番手として僕は登山道に入りました。

いつもなら走るところも今回は慎重に歩きました。なるべく膝に負担をかけないよう、筋肉を使わないように。この道を帰りに通るのは一体何時だろう、明るいうちに通れるだろうか。「円井はこの先に待つ最悪の事態を、このとき知る由もなかった」そんなフレーズが頭をよぎりました。

行程は予想以上にスムーズに進みました。中間地点の縄文杉で 2 時間、宮之浦岳山頂までは 3 時間 40 分で行くことができました。案ずるより産むが安し。帰りのトロッコ道はすべて歩きながらも、全行程休憩込みで 8 時間という、ごくありふれた時間での帰還を果たしました。おかげで、帰還の報告をした海中温泉では、時の人になることができました。

その後、祖母山、阿蘇山、久住山を立て続けに登り、足に痛みはなくなりました。献身的なアイシングのせい、暖かい気候のせい、はたまた数多く入った温泉のおかげか、腸脛靭帯炎はもう治ってしまったかのようでした。「ついに道は開けた」そう思いました。体力の増強かつ故障の治療、その 2 つを両立できたのです。決断と挑戦に勝ったのです。

～ 発熱 - スタートまでのカウントダウン - ～

ロングドライブを終え、鳥取の実家へたどり着きました。2 日間休養して京都で全日本。完璧なシナリオが今終わろうとしています。もう舞台はととのったのです。「脛論」と腸脛靭帯炎、この 2 つを克服した今、言い訳は見当たりません。もし準備というものがないことを

取り除く作業だとしたら、まさしく準備はうまくいったのです。

翌朝、うまく眠れない中、不快な目覚めを迎えました。体中の関節が痛みました。硬いフローリングにせんべい布団じゃ、長旅の疲れも癒せないよ、と心の中で親に不満を向けていました。それにやけに寒い。寒波か？インターネットで全日本のプログラムをダウンロードしました。つばめ会の掲示板に好調を主張しました。しかしやけに寒い。寒気が止まらない。少し寝ようと今度は柔らかい布団に入りました。ただ、変な感じがして眠りには落ちることはできませんでした。もしかしたら熱が出たかなと思いました。まあ一晩寝れば治るだろうけど、全日本が控えているから、ここは大事を取って病院に行っておこう。そう思って病院を尋ねました。それにしても寒い。体温計を渡され計りました。38.4。・・・ふう。落ち込みはしませんでした。何より、寒気がするだけなのです。鼻水も咳もありません。熱があるだけです。ガンガンに走れる気がしました。健康そのものじゃないかと。この時点でレーススタートまで40時間ほどもありました。明日岡山で友達と会い、姉の家から当日朝新幹線で京都に向かう予定でしたが、全てキャンセルしました。ぎりぎりまで鳥取で養生して、完全に熱を下げてから動こうと、ここで下手に動いて悪化させるより、ここで待機しようと考えました。タイムリミットは大会当日へ日付が変わった瞬間、午前1時半発の列車に乗り込むために移動を始めるそのときまでです。深夜、もどしました。病気でもどしたのは初めての経験でした。京都へ移動すらできないかもしれない。苦しい夜でした。翌朝、熱は37.1。行ける、そう思いました。スタートまであと24時間。鳥取を離れるまで12時間。熱が36台なら、最低でも走れる。熱が38あれば出走は無理かもしれない、そうとも思いました。僕は大学4年時のOLT杯を思い出していました。取るべくして獲らなければならないOLT杯。僕は一度もそれを手にしたことはありませんでした。エースとしてそれは誰にも譲ってはならないタイトルであり、OLTの歴史をみてもそれはどうしても欲しいものでした。直前に風邪をひきました。前日まで寝込んでいました。今回と同じです。当日熱は下がりました。しかし体力は回復しませんでした。僕はOLT杯を取ることはできませんでした。

結局熱は下がりませんでした。親からは散々「無理するな」「明日飛行機で帰れ」と言われました。「体調が悪いということは周りの人間にも迷惑を掛けるということだぞ」とも注意されました。「行けるところまで行く」僕はそう考えました。鳥取を離れる時点で37.6。スタートまで約10時間。夜行列車で横になって眠りました。目覚めたとき、熱が下がることを祈って。翌朝、京都へ。熱は37.6。全く下がってはいませんでした。京都駅ビル。突然嫌な予感がしました。トイレへ向かいました。腹を下しました。それは滝のようでした。どこまで苦しめばいいのでしょうか。ヒマラヤで目的地直前で強烈な下痢に泣かされた経験がありました。あと数時間でのゴール、いままでの苦勞、それらを捨てて帰路についた挫折の経験。あの惨めな寂しさを思っていました。山岳の世界では、ピークへのアタックは全ての隊員が許されるわけではなく、その日の体調が最も優れた隊員のみアタックの許可が下りるものだと聞いたことがあります。今の僕では明らかにアタックは許されないでしょう。いくら今までの道のりが長く苦しいものであっても、答えはNoなのです。このまま新幹線で東京へ戻ることも考えました。おそらくそれが一番賢明な答えでしょう。「とにかく大会会場へ向かってみよう」僕は頑固でした。責任は自分で取る。荷物は石のように重く感じられました。「体調が悪いときは絶対入っちゃダメですよ。ものすごいエグイところなんですよ」AMEX合宿で京大の大北さんと許田くんが全日本のテライン「大文字」についてアドバイスをしてくれたことを思い出しました。ははは。僕はまさしく体調のどん底最悪ピークでそこに向かってるのだな。笑えてきました。テライン内で血へどを吐くか。そんなイメージもわきました。リタイアしたところで斜面がきつくてゴールへたどり着けないかもしれない。

会場へ着きました。誰と話す気力もありませんでした。ですが、走る準備をしているうちに少し元気がわいてきました。やはり戦場へ向かう戦士として血が騒いだのでしょうか。気力が勝ってきました。テラインで倒れることだけは避けたい、自力で帰還したい、ハンガーノックと脱水症状だけには気をつけるため、無理矢理おにぎりやゼリー飲料、水をお腹に入れました。

冷たい風の中、スタートへ向かいました。そして僕はスタートへ立つことができました。

おわりに

(3月26日の日記より)

長らく目標としてきた全日本が終わりました。

軽い放心状態でもあります。

そして今日は卒業式でもあります。

ついさっき 200 通近いメールを読みました。

熱い後輩達、そして全日本選手権者。

敗れ去った選手、ボロボロになってゴールして倒れ込んだ選手。

複雑な気分です。

感想としては、「走ってよかった」です。

これが全日本だったのか。

腸脛靭帯炎がありました。

修論がありました。

この 2つが全てだったような気がします。

もちろんコーチとしてインカレにも臨みました。

パワーをもらいました。

故障に負けないためにも、山にも挑みました。

全てを克服したかのようでした。

全日本 10 位。

僕はこの目標を無謀とは思っていませんでした。

腸脛靭帯炎を克服した時点で「行ける」と思いました。

だが、38 の熱。

回復は間に合いませんでした。

夜行で朝、京都に着いた時点で熱は 37.6 。

ここにきて猛烈な下痢までも僕を苦しめ出しました。

しかしここで走るのをやめることだけはできませんでした。

あそこまでむきになって頑張ってきたのは一体なんだったんだ。

ここでやめたら自分自身が納得できないだろうと。

あれだけ気合いを入れて頑張ってきたのが報われないじゃないかと。

途中でリタイアしたっていい。

行けるとこまで行こう

そう考えて、僕は走ることを決意しました。

後悔はしていません。

むしろ晴れ晴れしい気分です。

負けは負けです。

これで気持ちよく来年また出直そうと思います。

つばめ会合宿のご案内

- ・日程 2002年5月4日・5日(5月3～6日は4連休)
- ・トレイン 「奇跡」「村山登山口」等(静岡県富士宮市)
- ・宿泊地 「西の家」(25名で仮押さえ済。)
- ・宿泊費 社会人 11,000円, 学生 6,000円程度(一泊二食、飲み代は別勘定)で考えています。
(学生はもっと安くなる可能性大。20・21期の若人は大歓迎です!)
- ・運営: 13・14期(現在中心となっているのは 13期 中川さん・佐々木さん 14期 平松、太田、羽根)
- ・締め切り 4月6日(土)(締め切りが延長されたそうです)
- ・申込先 つばめ会ML(このメールに返信しちゃってください。)または羽根(CQG00355@nifty.ne.jp)

各係からのご連絡

各役員からの連絡です

円井会計局長からの連絡です。

つばめ会会費の払い込みのお願い

つばめ会会計局長 : 円井基史

つばめ会では OB 同志の親睦を深めると同時に現役への支援も行っています。今年度もインカレプログラム広告、インカレへの差し入れ等を行ってまいりました。ただ現状では予算が乏しく、皆様の会費の納入という形でのお力添えを頂きたい思います。

会員は基本的に 20 期以上全員、会費は学生 1500 円、社会人 3000 円です。大会会場や飲み会などで私に手渡して頂ければ幸いです。また振り込みでも構いません。

郵便局

記号 10020 番号 70858191

みずほ銀行 (旧第一勧業銀行)

店番号 145 口座番号 1760811

何卒よろしくお願いたします。

2001 年 10 月 20 日時点で会費を納入していただいた方 (敬称略)

浅野昭 (12 期)、村田達司 (12 期)、中川隆義 (13 期)、羽根靖晃 (14 期)、平松宗太郎 (14 期)、斎藤玲彦 (15 期)、長坂俊郎 (15 期)、高倉健 (16 期)、和田雄一郎 (16 期)、奥田健史 (16 期)、河合剛 (18 期)、當銘直告 (18 期)、村田素久 (18 期)、粕谷泉 (19 期)、円井基史 (19 期)、川俣智 (20 期)、仁多見剛 (20 期)

當銘名簿局長からの連絡です。

名簿情報提供のお願い

當銘直告(18期、名簿局長)

つばめ会では、同期会など OB・OG 間の親睦を深める諸活動の際に活用できるよう 会員の住所や電話番号、メールアドレスなどの連絡先をつばめ会会員名簿として管理しております。

さて 4 月から新しい生活が始まった会員の方もいらっしゃると思います。そこで皆さんにお願いがあります。名簿情報を最新のものに維持しておくために、連絡先に変更がありましたら、新しい連絡先情報を當銘まで連絡をお願いいたします。連絡先は以下の通りです。

・當銘(トウメ)の連絡先

メールアドレス :toume@milk.freemail.ne.jp

電話番号 :045-975-0277

・名簿情報の項目 (以下の情報をご連絡下さい。)

名前・期・出身学科、専攻・郵便番号・住所・電話番号・メールアドレス・勤務先会社名：

連絡先情報は、2 年に一度会員に配布されるつばめ会会員名簿に掲載されます。次回配布は来年度の予定です。つばめ会会員名簿は個人情報ですので、会員間の連絡以外の用途には一切利用致しませんし、会員の皆様も会員の迷惑となるような用途に使用しないようご協力をお願いします。

また「電話番号は名簿に掲載したくない」といった希望や、「 期の 様の連絡先を教えて欲しい」といった問い合わせも、當銘まで伝えてくだされば対処致します。

最後に繰り返しになりますが、新しい連絡先情報の提供をよろしくお願いいたします。

和田総務部長から、総会の議事録です。

第五回つばめ会総会にて議題にのぼった項目を簡単にご紹介します。

第五回つばめ会総会議事録 (ダイジェスト版)

日時 2001 年 10 月 20 日 (土)

場所 東工大大岡山 W331 講義室

出席者 (敬称略)

浅野昭、村田達司、中川隆義、田中宏樹、羽根靖晃、平松宗太郎、
斎藤玲彦、長坂俊郎、萩生大介、奥田健史、高倉健、和田雄一郎、
河合剛、當銘直告、村田素久、円井基史、川俣智、仁多見剛

(1) 役員の改選について

前役員の任期完了に伴い役員の改選が行われた。以下の通り新役員の候補が挙がり、採決の結果全員一致で承認された。

会長 高橋秀行(留任)

幹事長 奥田健史

事務局長 仁多見剛(留任)

会計局長 円井基史

名簿局長 當銘直告

総務部長 和田雄一郎

広報部長 川俣智

(2)会則の改定について

奥田氏により会則の改正案が提出され、その内容についての議論が行われた。

その結果、会則の改正がなされた。

(3)2001 年度会計報告(長坂氏)

収入 ¥105,061

支出 ¥62,642

収入 - 支出 ¥42,419

前年度繰越金 ¥92,887

翌年度繰越金 ¥135,306

(4)会報の送付方法について

E-mail にて送付可能な会員に対しては E-mail で送り E-mail で受け取れない会員には郵送する。

(5)インカレ広告のサイズについて

インカレショー分の金額 (¥5,000 か ¥10,000)については、幹事会および担当者 (21 期)へ委任することになった。

(6)つばめ会合宿について

運営者より状況の報告。

(7)その他

会費の使い方について

名簿の情報の精度について

事務局長は今春で交代します。仁多見氏から退任の挨拶です。

事務局長の退任にあたって

仁多見剛(20 期)

昨年度、事務局長としてつばめ会総会の準備を初めとする諸々の業務をこなしてまいりました、仁多見です。

東工大 OLT も既に 24 年 (?) の歴史があり、OB・OG も相当数いることを実感しました。会員間で会う機会はそれほど多くなく、総会は重要な機会となっているという感じがしました。来年度以降もしっかりとした運営をお願いいたします。> 後任者様。

後任人事は調整中につき、今しばらくお待ちを。きっと立派に仕事をしてくださると信じております。

ML・ホームページについて

つばめ会会員間の連絡手段の1つとしてつばめ会 ML(メーリングリスト)を立ち上げています。大会情報・観戦記、同期会・飲み会の連絡、近況報告など、自由に使ってください。メールアドレスは tsubame@egroups.co.jp です。ご不明な点がございましたら、管理者の當銘直告氏(toume@milk.freemail.ne.jp)までご連絡ください。この ML に関するホームページ(登録メンバーのみ) <http://www.egroups.co.jp/list/tsubame> にもぜひアクセスしてください。

また、つばめ会およびつばめ会湘南支部のホームページが稼動中です。ぜひご覧ください。

つばめ会のホームページ(作成者: 円井基史氏(19期))

<http://www.geocities.co.jp/Athlete-Olympia/1614/>

Forest Green(つばめ会湘南支部のホームページ)(作成者: 佐々木順氏(13期))

<http://www3.plala.or.jp/junkun/>

東工大 OLT のホームページもリニューアルしました。ぜひアクセスしてください。

東工大 OLT のホームページ(作成者: 小川千隼氏(22期))

<http://titolt.hoops.ne.jp/>

久しぶりに OLT の大会へ参加してみたい方は、つばめ会 ML または川俣までお問合わせください。また、以下のホームページをおすすめします。

Orienteering.com

<http://www.orienteeing.com/index-j.htm>

森を走ろう!

<http://www02.so-net.ne.jp/~forest/>

インカレ広告について

今年度もつばめ会ではインカレのプログラムに応援広告を掲載いたしました。このインカレ広告というのは、ここ数年は M1 の学生を中心に作成するのが恒例となっています。今年度は、川俣が作成しました。インカレの広告自体は、<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Keyaki/4071/olt/file/ic-kokoku.PDF> にアップロードしてありますのでご覧ください。ML などでの反応を見る限り、それなりに好評だったようで一安心しております。来年の作成者の方は頑張ってください。

編集後記

私が編集した最初の会報はいかがだったでしょうか？

基本的に原稿を書いていただいた方の原稿をコピー&ペーストするだけなのですが、それにしてもこれくらいのページ数になるとそれなりに大変なもので、一日の午後を丸々つぶして編集作業をすることになってしまいました。無駄にレイアウトを考えてみたり...

ちなみに今回は第2巻第1号(通巻12号)です。第x巻は編集者ごとにこれから増やすということで。

インカレ、全日本と終わり新年度に入りました。そろそろ部室にも新入生の顔が見られるようになるでしょう。新しい年度は、どんな風になるのか、OBとして見届けてみたいと思います。

そのまえに私は就職活動をしなくてははいけません。超氷河期と言われるこの時代、OB/OG 諸氏の方々、こんな私に助けの手を...

2002年4月 すすかけ台にて 川俣智(つばめ会広報部長)

次号予告

次号の Slope は、今年夏の発行を予定しています。特集としては、5月に行われるつばめ会合宿。また、せっかくのOBが集う機会なので、会費をきちんと円井さんに払ってあげてください。...じゃなくて、広報部としては、次の会報のためのなんらかの企画を考えています(飲み会とかじゃないです)。特に、部長経験者やコーチ経験者、エリートクラス経験者の方には容赦なくインタビューに行くかもしれません。そのときは門前返しにしないでください。座談会と言うのもいいかも。

と、いうわけでつばめ会広報部では、つねに会報に載せる原稿、企画などを募集しています。また、結婚、出産などの慶事があったら、垂れ込んでくださいますようよろしくお願いいたします。

東工大オリエンテーリング OB/OG 会 つばめ会 会報 Slope

2002年4月号(第2巻第1号 通巻12号)

発行者：つばめ会

編集者：川俣 智(20期：つばめ会広報部長)

連絡先：kawamata@mhd.es.titech.ac.jp

つばめ会ホームページ URL: <http://www.geocities.co.jp/Athlete-Olympia/1614/>